

【基調講演、当事者・支援者からの話を聞いて感じたこと】

- ・当事者に紹介できる社会資源が少ないと考える。増やしてほしい。具体的には、同じ経験（家事の担い手や家族のケア）をしている年齢の近い人と交流できる場。自分だけではないと実感できる体験の場。
- ・他の参加者の発言を聞いて、講義の中で疑問に思ったことが解けたように思う。ヤングケアラーに「自分らしさを見つけよう」といって一人でやっごらんではなくて、支援者や周囲の大人たちが鏡になって、本人の話を聞いて、本人を映し出すことで一緒に「その子らしさ・自分らしさ」を探ることができるのではと思った。
- ・日常業務では解決を急ぐあまり単純な関わりになってしまうこともある。しかし、解決より気がつくことが大切ではないかと感じているし、改めて感じた。
- ・病気の母をもつ子が実際にいる。気にかけることしかできないかもしれない。でも気にかけることを大切にしていきたい。
- ・障がいのある子どもを連れてくる親が「上の子が手伝ってくれる」と話していて、いい話と思っていたが、上の子は手伝っていて happy だったのか？理想的な家族とヤングケアラーの家庭は紙一重だと思う。
- ・社協の地区活動で感じることに、民生委員でできること、包括でできること、は一もにいでできること、限界があるが連携してやっていたら、きっかけ作りができたらいい。
- ・ヤングケアラーは誰がどう判断するかで変わってくる。公の人間が入ってくることに抵抗感がある場合でも、地域の人、身近な人なら大丈夫かもしれない。地域活動、気づきが大事。
- ・地域で関わっている世帯がある。祖母と父子世帯について。子どもに声をかけていくうちに、子どもにとって知っているおばちゃんになり心を許してくれる関係になっている。「一人じゃないよ」「気にかけているよ」「安心して相談ができる場所だよ」と伝えていくことが大切ではないかと感じた。
- ・担当業務を通じて、親子に関わらせていただいている。相談の始まりは親御さんだが、親御さん自身手続きが難しいけれど一生懸命手続きされ貸付に至っている。貸付後に必要な手続きもあるが、その時は手続きを通じて、顔見知りになった子どもが相談してくれてようになった。声をかけながらつながりをつくるのが大切と感じた。
- ・障がい児のお迎えに来ているきょうだい児に「えらいね」と声かけを以前していたが、本当はもっと違う声掛けもあったのではないかと感じている。ただ、相談を促すことも踏み込みすぎではないかとためらってしまう。
- ・子どもたちからすれば当たり前のこと、家庭での役割となっていることがある。しかし、当事者の方の話からもその後に見える影響が大きいこと、信頼できる大人とのつながりの大事さなどをもっとお知らせしたい。もっと情報を知っておきたい。
- ・地域の情報、ネットワークを通じてヤングケアラーではないかと気づくことがある。気づいた後、次に支援を当事者家族にどうつなげるかが、課題だと思う。